

古代中央アジア文化の起源

堀 暁

はじめに

筆者の興味・関心は古代中央アジアの青銅器文化、初期鉄器文化にある。特に、メソポタミアに起こった都市文明がどのようにイラン高原や中央アジアに移植され、変形され、根付いていったか、その過程を明らかにしたいと考えている。この点に関してゴヌール遺跡の成果を基に活発な意見を発表しているのがV. サリアニディ博士であるが、必ずしも賛同できない部分が多い。

問題の中心は、いわゆるインド＝ヨーロッパ語族のインド＝アーリヤ、あるいはインド＝イラン、さらにインド＝アーリヤをどのように捉えるのかにある。一般的な仮説はインド＝ヨーロッパ人南ロシア起源説に基づくもので、紀元前3千年頃に南ロシアの住んでいたインド＝イラン系の民族が東方に移住し、イランとインドにそれぞれ落ちていて、イラン文明やインド文明を形成したとするもので、教科書や一般の概説書はこの仮説に沿って記述されている。

一方、サリアニディ博士は、ミタンニ・インド＝アーリヤを重要視し、彼らこそゴヌール文化（いわゆるBMAC文化）の源流となり、さらに南下してインド文明を形成したと主張する。そこで彼はゴヌール文化にみられるアナトリア的要素を重要視するのである。

筆者はインド＝ヨーロッパ語族の起源地は北シリアであり、インド＝イラン人が東方へ進出したのは農業の広がりとは一致する、すなわち紀元前6千年紀のことであるとする「インド＝ヨーロッパ語族北シリア起源説」を仮説として提唱している。

様々な仮説はあるが、どれが現在の知識に基づいて妥当なのかは、現実の考古学的調査の成果ばかりではなく、なによりも民族の移動を問題にしているのであるから、人類学、比較言語学の成果もふまえて考察してゆかねばならない。

人類学的見地

現代人はホモ・サピエンスというただ一つの種に属しているとされる。この現代人は様々なグループに分かれるが、その系統を明らかにする手段がDNA分析である。地球規模のDNA分析として最も信頼が置けるのは、キャヴァリ・スフォルツァらによる研究で、この広範囲にわたる調査の最終分析図が図1に示すものである。この図によれば、最も古いタイプの①から最も新しいタイプの④までが西アジアを中心に同心円状に広がっている様子が見て取れる。

後期旧石器文化は西アジア起源と一般に考えられており、この①②③④の分布は考古学的知見に合致する。④の波は最も新しいもので、北インドから

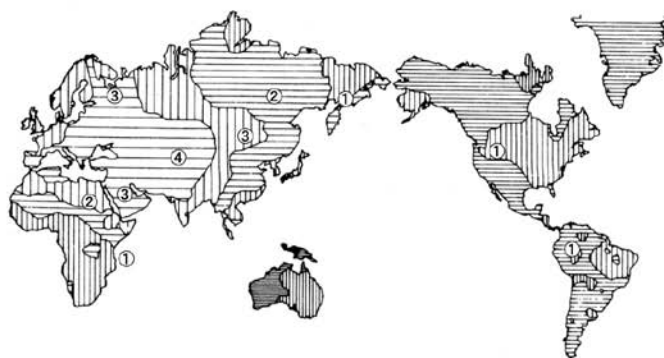


図1 人類遺伝子地図
Cavalli-Sforza, L. L., P. Menozzi, A. Piazza. 1994による

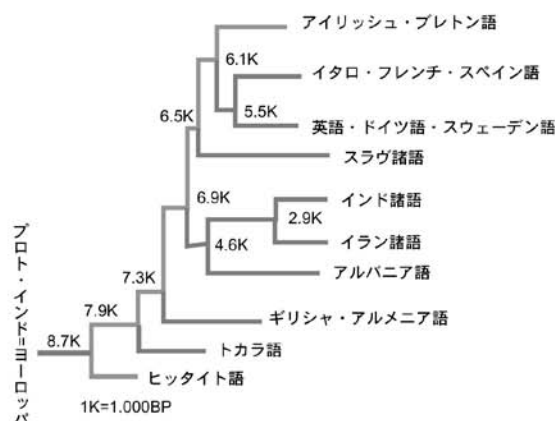


図2 印欧語系統樹
Gray, R. D. & Atkinson, Q. D. 2003による

イラン、西アジア、ヨーロッパの大部分を網羅し、新石器農耕文化の広がりとも一致するように見える。その中心は北シリアにあり、紀元前 6 千年頃からの西アジア型農業の拡散とパラレルである可能性が高い。

比較言語学的見地

インド＝ヨーロッパ語族の言語の系統については系統樹の形で近縁関係が示されてきたが、これまではヒッタイト語の位置づけが明確にはされてこなかった。ヒッタイト語は文法構造がサンスクリット語より単純で、かなり古い様相を持っている。これまではプロト・インド＝ヨーロッパ語 (PIE) と兄弟関係にあるのではともされていたが、兄弟なら親がいるはずで、PIE を一段古くすれば系統樹の中に取り込めるはずであろう。

最も新しい研究ではヒッタイトも取り入れられ、図 2 のような系統樹にまとめられている。ここでは一時盛行した言語年代学も新しい形で取り入れられ、分岐年代に関する提案も含められている。ヒッタイト語が最も古いインド＝ヨーロッパ語とすれば、PIE もその近辺にあった可能性が高く、筆者の「インド＝ヨーロッパ語族北シリア起源説」と重なってくるのである。

考古学的知見

西アジア型農業の出現と波及については十分な研究が積み重ねられており、ここで詳細に論ずる必要もないであろう。レバント地方で紀元前 8000 年頃生まれた農耕文化が、北シリア方面家畜飼育と組み合わせられ、複合農業に成長した。これがセットとなって、やがて前 6000 年頃からヨーロッパ、イラン、中央アジアに拡散していったのである。

最近の人類学的研究や比較言語学的研究と組み合わせることによって、印欧語族の広がりに関して全く新しい説明が可能になったのである。筆者はこれを統合説と称している。

中央アジアの先史文化

統合説に従えば、中央アジアの先史文化はきわめて明快に論ずることができよう。トルクメニスタンにおける最も古い農耕文化はジェイツーン文化で、それは北イランの後期新石器文化と一致する。イラン側を代表するのはタッペ・サンギ・チャハマック

で、先土器時代から土器新石器時代にかけての遺跡である。その文化とジェイツーン文化を比較したのが図 3 である。

ジェイツーン文化の次の段階はアナウ I A 文化と呼ばれるもので、アナウ遺跡最下層やチャクマクリイ遺跡にみることができる。土器はジェイツーンと同じ赤色磨研黒色彩文土器 (Black on red burnished) で、規格的な幾何学文が施される。家屋配置もジェイツーン段階では散在的であったが、この時期になると小路に沿って規格的に並ぶようになる。この段階のイランの遺跡は、テヘラン西方のカラテペに見ることができる (図 4)。

この後期新石器段階に続くのはナマズガ編年で、ナマズガ I 期から VI 期まで、金石併用期から青銅器時代までをカバーしている。この時代は中央アジアにおける土着化文化の発展過程と捉えることが可能である。ナマズガ II - III 期にはテジェンデルタやムルガブデルタが開墾され、さらにタジキスタンのサラズムにも町邑が営まれるようになる。

ナマズガ III - IV 期には遺跡の規模が拡大し (図 5)、IV - V 期には都市国家と呼べる段階 (ナマズガデペ、アルティンデペなど) に達する。ラピスラズリ、金、銀、鉛などの鉱物資源をイラン高原を通じてメソポタミアに供給する遠距離交易の発展が、その背景にある。

続く BMAC 文化の代表的遺跡がサリアニディ博士によって長年にわたって調査されているゴヌール遺跡で、王墓や王宮、巨大な神殿の発見によって注目を集めている。

初期鉄器時代に関しては調査例が少なく、内容は判然とししない。タイプサイトであるマルグーシュのヤズデペにはヤズ I 期の以降として巨大な日干しレンガ積みの基壇 (100 × 120m、高さ 8m) が発見されている。コペトダーク山麓沿いのウルグデペも巨大な遺跡であるが、本格的調査は始まったばかりである。この時代はバクトリア、ソグド、メルブ、フェルガナ、ホレズムなどに領域国家が成立した時代と考えられ、建築、灌漑網の建設が進められたと考えられている。それが、やがてアケメネス朝ペルシアの侵略を招くことになる。

中央アジア文化の担い手

簡単に中央アジアの文化発展の様相を見てきたが、大きな劃期として、1) 新石器農耕民の移住、2)

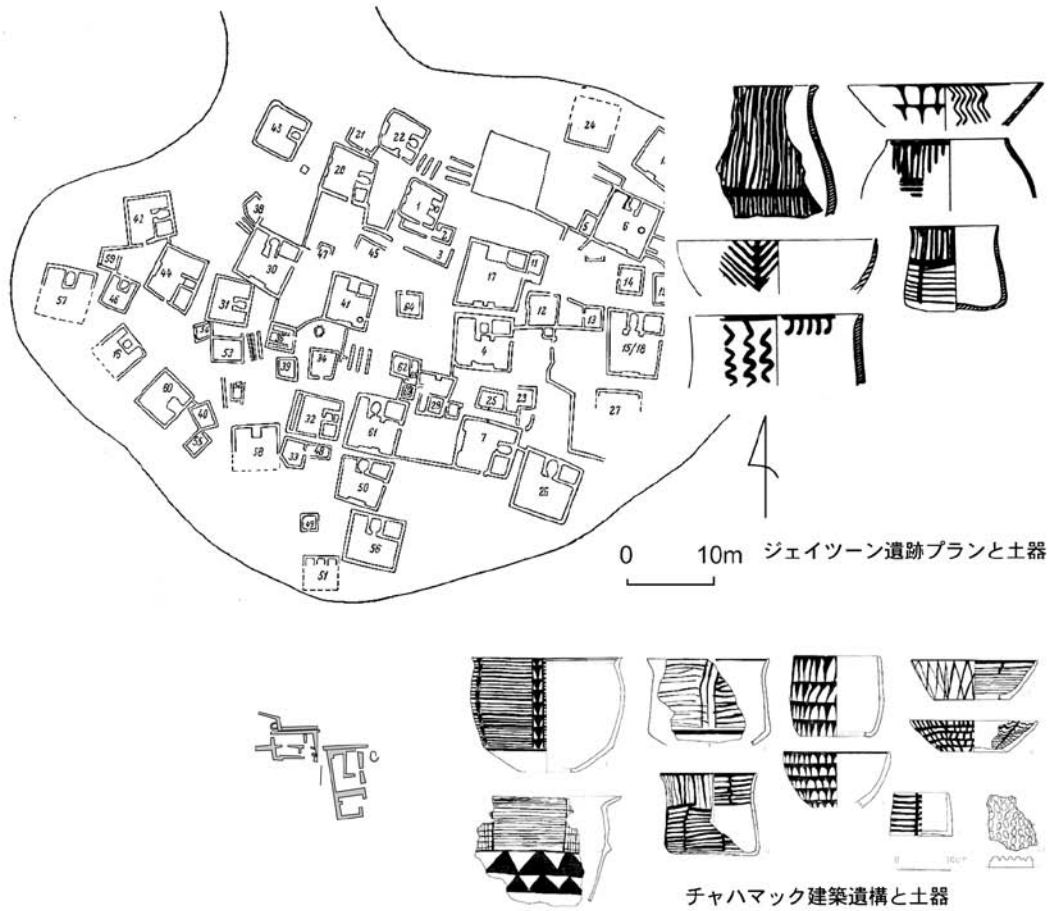


図3 ジェイツーンとチャハマックの比較

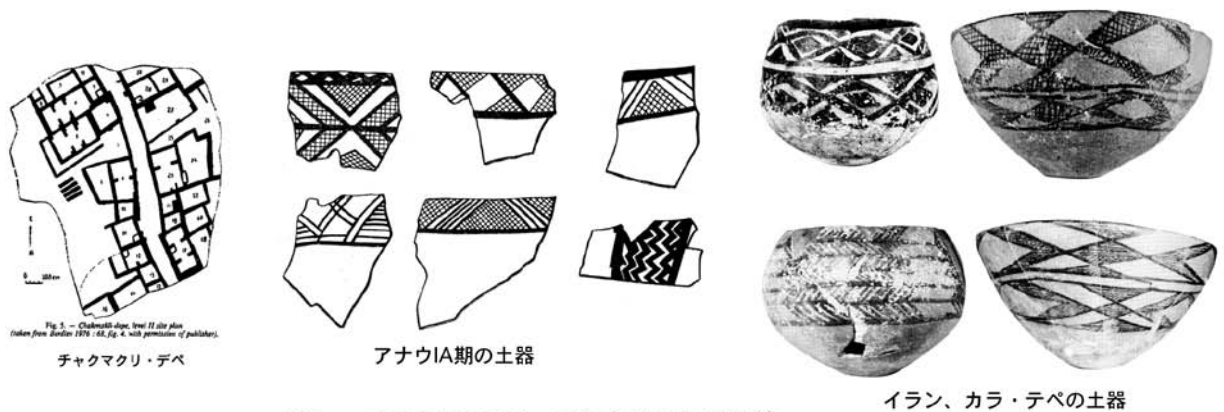


図4 アナウIAとカラ・テベ（イラン）の比較

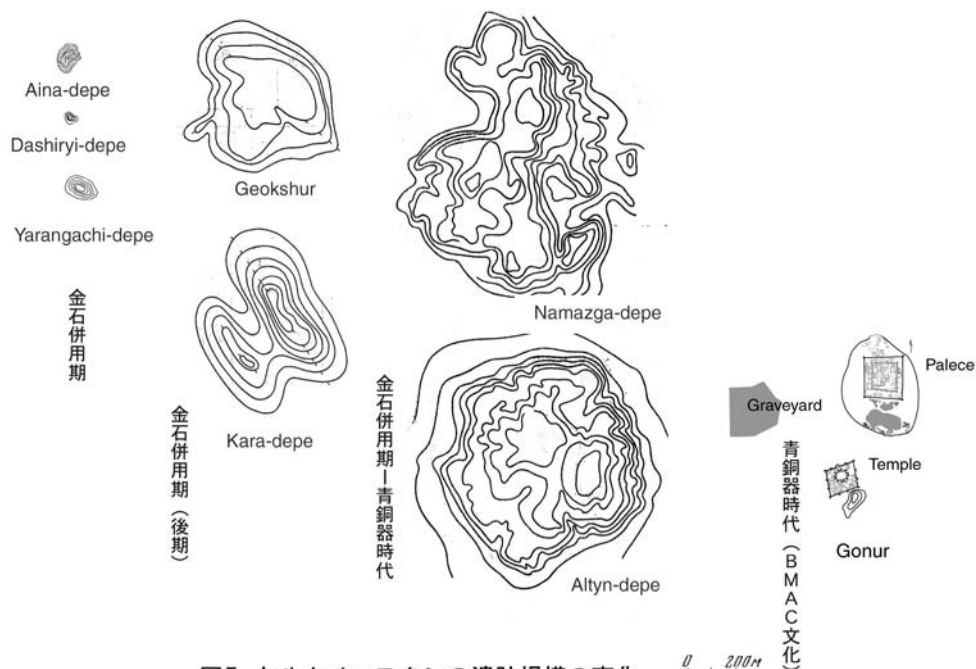


図5 トルクメニスタンの遺跡規模の変化

土着文化の発展、3) 都市国家の成立、4) 領域国家の成立を挙げることができよう。

1) に関してはイランからの人間集団の移住であり、民族的にはインド=イラン段階と考えられる。2)～3)はイラン化が進展する段階と考えられよう。4)の段階は図2に示したインド系言語とイラン系言語が明確に分離した段階である。インドではインダス文化が終息に向かい、後期インダスの遺跡が東方のインダス上流地域に集中し、やがてガンジス川流域で領域国家が成立していく時代に当たる。

このように見てくると、イラン文化、あるいはインド文化に関して、前2千年紀における民族移動の波を想定する必要は全くないという主張は、決して無謀な仮説ではないであろう。

Khol, P. L.

1984 Central Asia: Paleolithic Beginning to the Iron Age, Paris.

Masson, B.M. & Meppert, N. Ya.

1982 Eneolit SSSR, Arkheologiya SSSR, Nauka, Moscow.

SARIANIDI, V. S.

1998 Margiana and Protozoroastrism. Kapon Editions, Athens.

2002 Margush: Ancient Oriental kingdom in the Old delta of the Murghab River, Ashgabad.

堀 暁

2008 『インド文明の謎』 吉川弘文館 歴史ライブラリー

Burton-Brown, T.

1979 Excavation at Kara Tepe 1957, Oxfordshire.

Cavalli-Sforza, L. L., P. Menozzi, A. Piazza.

1994 The History and Geography of Human Genes. Princeton University Press, Princeton.

Gray, R. D. & Atkinson, Q. D.

2003, "Language-tree divergence times support the Anatolian theory of Indo-European origin", Nature 426: 435-439